

東北女子大学

米澤 暢子

緒言 古くからの伝統手工芸が、機械化による生産多様化の傾向が進んでいる今日ではあるが、年々伝統工芸に対する関心も高ま、ている中で、伝統的手工芸品にはあたたかい味があるといわれている。津軽地方のこぎん刺しもその一つである。前報の発祥と合わせて地域の模様構成の特徴を報告する。

方法 既存実物資料、聴取、その他写真写により考察した。

結果 こぎん刺しは地域別に特徴があげられる。

1. 東こぎん 弘前市及び中津軽郡一帯、背中に大きな中心模様をおく。
2. 西こぎん 黒石市及び南津軽郡一帯、前身頃の肩と胸に特徴があり、単独模様が多く組み合わせられている。
3. 三縞こぎん 北津軽郡、西津軽郡一帯、三本の横縞が入り、はっきり分けて模様をおく。

大別した三地域こぎん刺しは模様の構成が異なっている。

基本模様は、豆コ、花コ、猫の目、猫の足、市松、など単独模様で、日常目にふれる自然界から津軽地方独得の方言を用いた名前がつけられたものが単独模様となっている。

津軽藩諸法度により厳しい生活の中より考え生み出された津軽のこぎん刺しは他にみられない素朴さの中で手工芸品として、美しいデザインの構成とすぐれた技術が新しい時代感覚のもとに現在も伝承されている。